

法然上人行狀略傳卷之上



支<sup>ミ</sup>我木本師釋迦如來ハ普く流浪三界の遂<sup>シテ</sup>  
をもぐりんがた免<sup>ムカシ</sup>小深く平等一子比悲願<sup>ハシメテ</sup>  
れぬ。忽<sup>ハ</sup>よ無<sup>ム</sup>釋迦嚴<sup>ムツカイニ</sup>の化を限<sup>カタマリ</sup>。娑婆<sup>サボウ</sup>鴻<sup>カク</sup>  
乃國に入<sup>ル</sup>。在世八十年慈雲等<sup>トシタツ</sup>く群生<sup>ムダラク</sup>は度<sup>ス</sup>。  
滅<sup>ス</sup>後<sup>ノ</sup>子餘圓法水為<sup>ム</sup>三園<sup>ミツエン</sup>流<sup>ス</sup>。荔門<sup>リツモン</sup>品良<sup>ヒヨウ</sup>小  
利益<sup>ス</sup>是<sup>シ</sup>區<sup>ムカシ</sup>なり。其<sup>ノ</sup>中に聖道の一门ハ様<sup>ス</sup>土<sup>ト</sup>り  
志<sup>ス</sup>て自力<sup>ス</sup>を勵<sup>ス</sup>。渴<sup>ス</sup>せよあひよては道<sup>ス</sup>成<sup>ス</sup>期<sup>ス</sup>也<sup>。</sup>但<sup>シ</sup>  
ふと經<sup>ス</sup>くも時<sup>ス</sup>流<sup>ス</sup>季<sup>ハ</sup>小<sup>ハ</sup>及び意<sup>ス</sup>塵<sup>ムカシ</sup>縁<sup>ス</sup>に<sup>ス</sup>セ<sup>ス</sup>

三悪<sup>あく</sup>に炎<sup>えん</sup>免<sup>まん</sup>也<sup>が</sup>。煩惱<sup>ぼんのう</sup>具足<sup>ぐそく</sup>乃<sup>おほ</sup>鬼<sup>おに</sup>夫<sup>ぶ</sup>順<sup>じゆ</sup>汝<sup>な</sup>  
輪迴<sup>りんご</sup>を、もねべきハ唯是淨土の一门のをもす。正範<sup>じやうはん</sup>よにきて諦<sup>だま</sup>家<sup>け</sup>乃<sup>おほ</sup>解<sup>げ</sup>釋<sup>し</sup>蘭<sup>らん</sup>若<sup>わ</sup>義<sup>ぎ</sup>矣<sup>は</sup>。或<sup>も</sup>は  
次<sup>たゞ</sup>といへども唐朝<sup>とうとう</sup>の善導<sup>ぜんのう</sup>和尚<sup>がく</sup>弥陀<sup>みと</sup>化<sup>か</sup>身<sup>しん</sup>として  
らどり本願<sup>ほんがん</sup>の深意<sup>ふかのい</sup>をあくべ。我<sup>われ</sup>乃<sup>おほ</sup>法然<sup>ほうじゆ</sup>丈人<sup>じゆじん</sup>  
勢至<sup>せいし</sup>の應現<sup>おうげん</sup>としてもくろ<sup>もくろ</sup>捕<sup>つか</sup>名<sup>な</sup>乃<sup>おほ</sup>要行<sup>ようぎょう</sup>をひろえ  
たす。和漢<sup>わかん</sup>圓<sup>えん</sup>昱<sup>よ</sup>化<sup>か</sup>尊<sup>そん</sup>一<sup>いつ</sup>教<sup>きょう</sup>よして男女<sup>めんじょ</sup>  
貴賤<sup>きせん</sup>信心<sup>しんぎん</sup>哉<sup>哉</sup>得<sup>とく</sup>とく往生<sup>むこうじゆ</sup>の陽<sup>よう</sup>を一<sup>いつ</sup>あらわす。  
念佛<sup>ねんぶつ</sup>の弘通<sup>こうつう</sup>にも盛<sup>さかり</sup>なりとく。而<sup>より</sup>尚<sup>よ</sup>天魔<sup>てんま</sup>  
やき<sup>やき</sup>あひりん念佛<sup>ねんぶつ</sup>の信行<sup>しんぎょう</sup>を妨<sup>さまため</sup>んとして。弟子<sup>だいし</sup>の罪<sup>つみ</sup>  
大師<sup>だいし</sup>よぶよほし。どうあた上人<sup>じょうじん</sup>を遠流<sup>とんりゆ</sup>よまさせ  
らる。あうれども其往<sup>みよ</sup>及<sup>およ</sup>諸<sup>よ</sup>訓<sup>くん</sup>乃<sup>おほ</sup>御利益<sup>ごりやく</sup>諸傳記<sup>よ</sup>傳<sup>つ</sup>  
にゆきとみゆきを猶<sup>よ</sup>加<sup>へ</sup>大師<sup>だいし</sup>の德行<sup>とくぎょう</sup>を讚仰<sup>さんよう</sup>して。  
御報恩<sup>ごほうおん</sup>謝<sup>あや</sup>徳<sup>とく</sup>乃<sup>おほ</sup>たれふ。愚癡<sup>ぐち</sup>の道俗<sup>どうぞく</sup>をもく先<sup>さき</sup>。  
一佛<sup>いつぶつ</sup>淨<sup>きよ</sup>土<sup>ど</sup>れ往生<sup>むこうじゆ</sup>乞<sup>こ</sup>ゆふ而已<sup>而已</sup>。

洛京極勝園精舍

文化十五寅年二月廿五日

聲譽<sup>せいう</sup>超<sup>ちよ</sup>道<sup>どう</sup>  
謹記

梓人ハ幕作園食の南條稻畠乃庄祐社と云  
御小て父ハ參れ押領便漆の時園母ハ葵氏也。  
夫婦子はれ事を歎きて、こうぞひじみ  
て常に佛神よ祈別く當圓岩間の觀音ハ  
靈驗だれこれとき。三七日參籠し舟船  
をねまんで一子を祈あるが。滿さん乃曉葵氏  
蓋よ刺刀客のむとて懷姪。月三もてほぬ  
う崇徳院ノ御宇。長承二年四月七日午の正  
中。葵氏あやむ事れく男子をうむ時ふらうて  
蒙雲天よそひく。家のあうゆ。あた乃様の本  
うり。白幡二流ぢびありてろの木す。ふかくも。見  
聞乃よ奇異のあひをあはれ生乃小異。不思議  
れ。童幼名號勢至乃と号して父母乃  
冕也限止めし。然りば童子竹馬小猿をうぐ  
るニあう。その性がふくして成人れよこ。  
やともとれバ西乃壁にむうひのむくせり。天台  
大師幼稚乃行狀りたがひ波すん倚りまつ。はるよ  
童子九岁保延七年乃春父時園ハ當庵の頃

前略

一

六三

前略の源内武者定明

伯耆守源長明（嫡男堀河院御在位の時）

大免

夜討あり深き夜をかり死門よのどむ。

至時より小兒が側ふそばすも絶れ治更り會社のもの

ちをあきひ敵人とうじゆの事あつて是をむと  
小前せ乃宿業ぞうし。暮遺恨をもとびも

怨せくに至りて。もとく俗名の名を

家號いで般若提をあくひ自身の解脱を

りとめよと稱んじにや。也丈婦親子のと  
はごひして。西りむらの燭臺合掌して佛を

念佛。眼がごとく息絶ぬひもありぬよ童子瓦

人よけさむぞ父乃遺云耳庵よもさぬどニ

も忘ばかひぐゆくうる怨歎を恨ましく唯佛

家小は我すをゆとあん後り定明源祐の心

あづうふして已遠乃羅をくひ萬象の苦痛を

一ミ念佛石こうて難波より往生の室我とく。

も子孫もあと人乃餘流をうけ津工代一石を

せひととき。室をもててゆりより定明も達

のほもをうなぐ念佛して往生。も子孫

又津工門より入。乞室小椎化乃善巧あるべ。  
遂精めて巧やしをなす事あるを





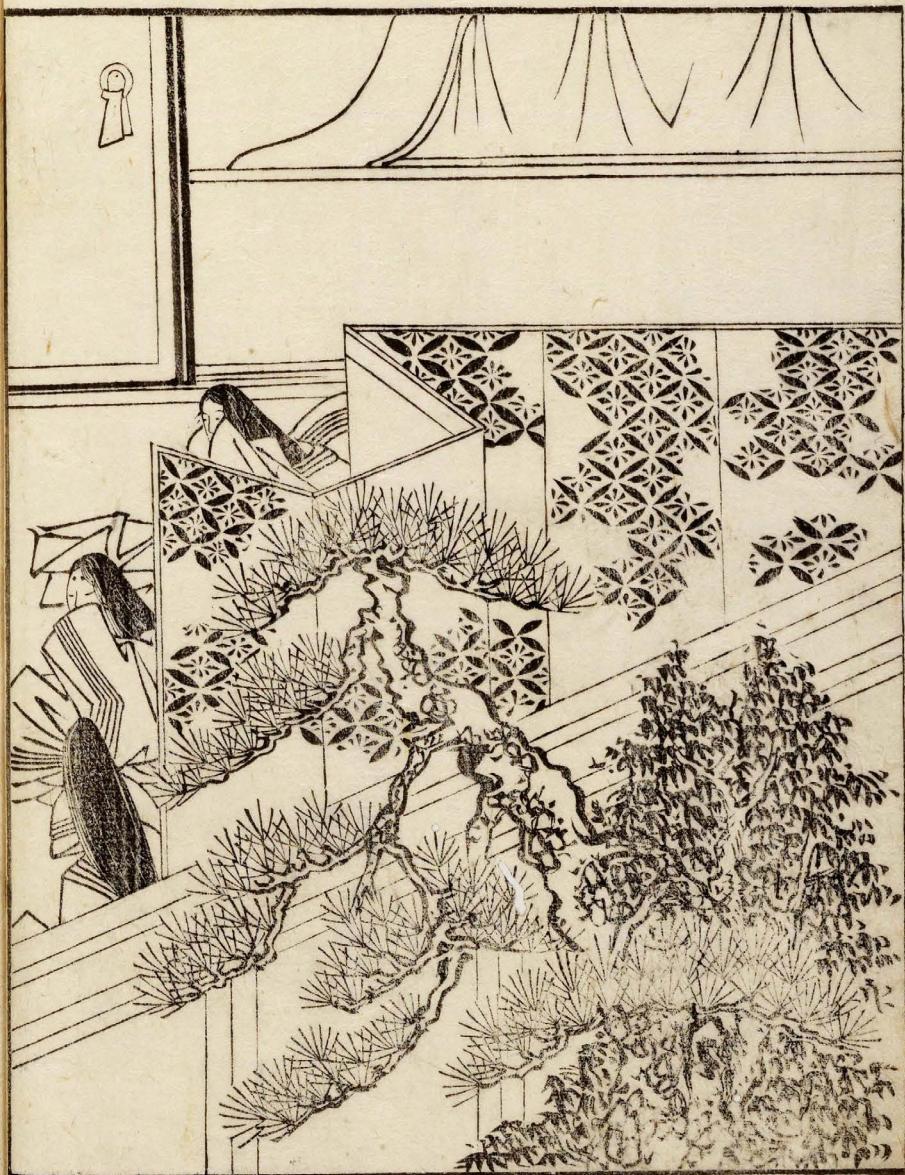
山圓う。善提寺とのよ山寺あり。彼寺の院主ハ  
觀覓得業とて延暦寺の学徒あり。大業  
乃至成達せざることをうなえ。南都よういに  
法相波學とておもをそぞひきの得業、とぞ  
トである。秦氏乃善なれバ小兒のためよ叔父す。  
童子祇室ふ入ぬ。學向乃性なづ海くあづらとも  
ミやうよーと。一闇千悟比英才習所憶持して  
志幸れ。得業はくく小兒の器量放るふ  
いりよも元人かづく。ひごぼくうも鄙ひ塵り



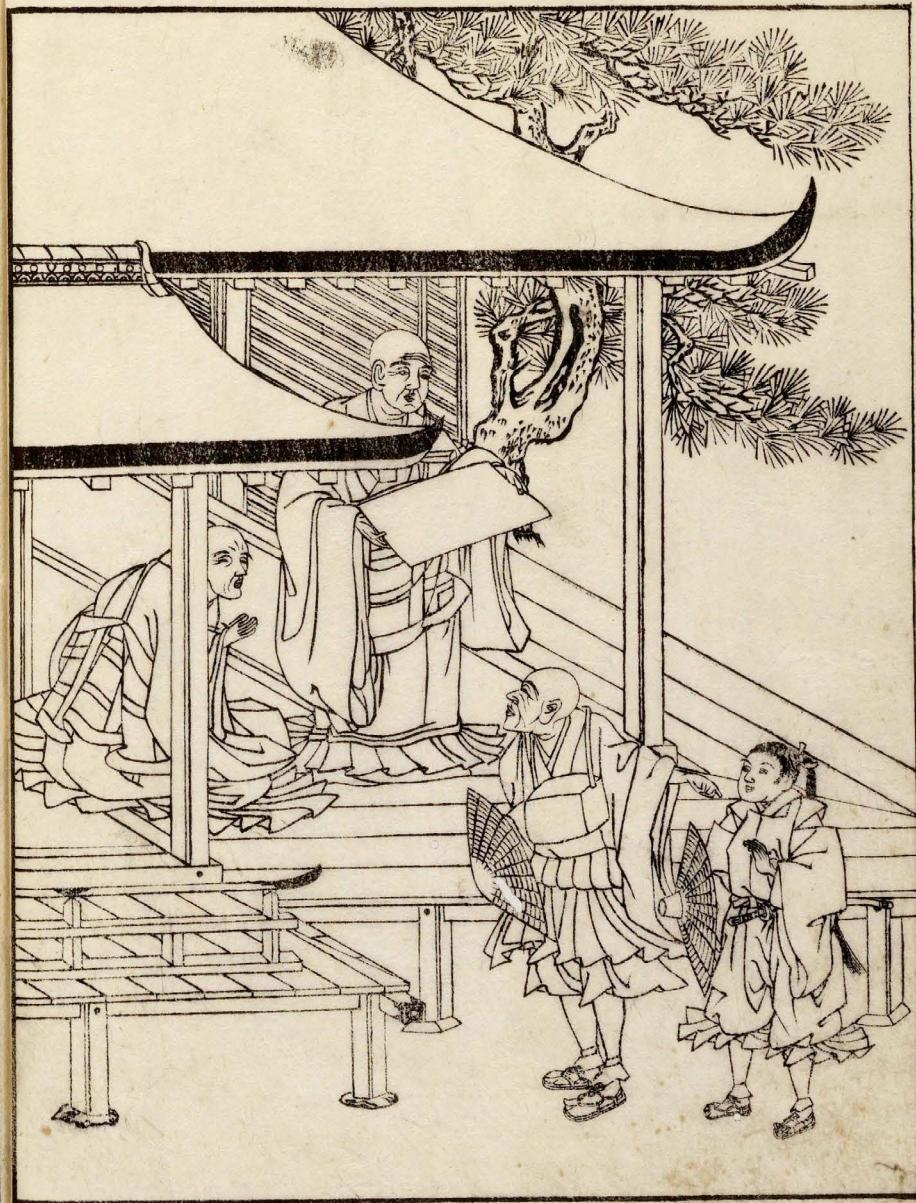
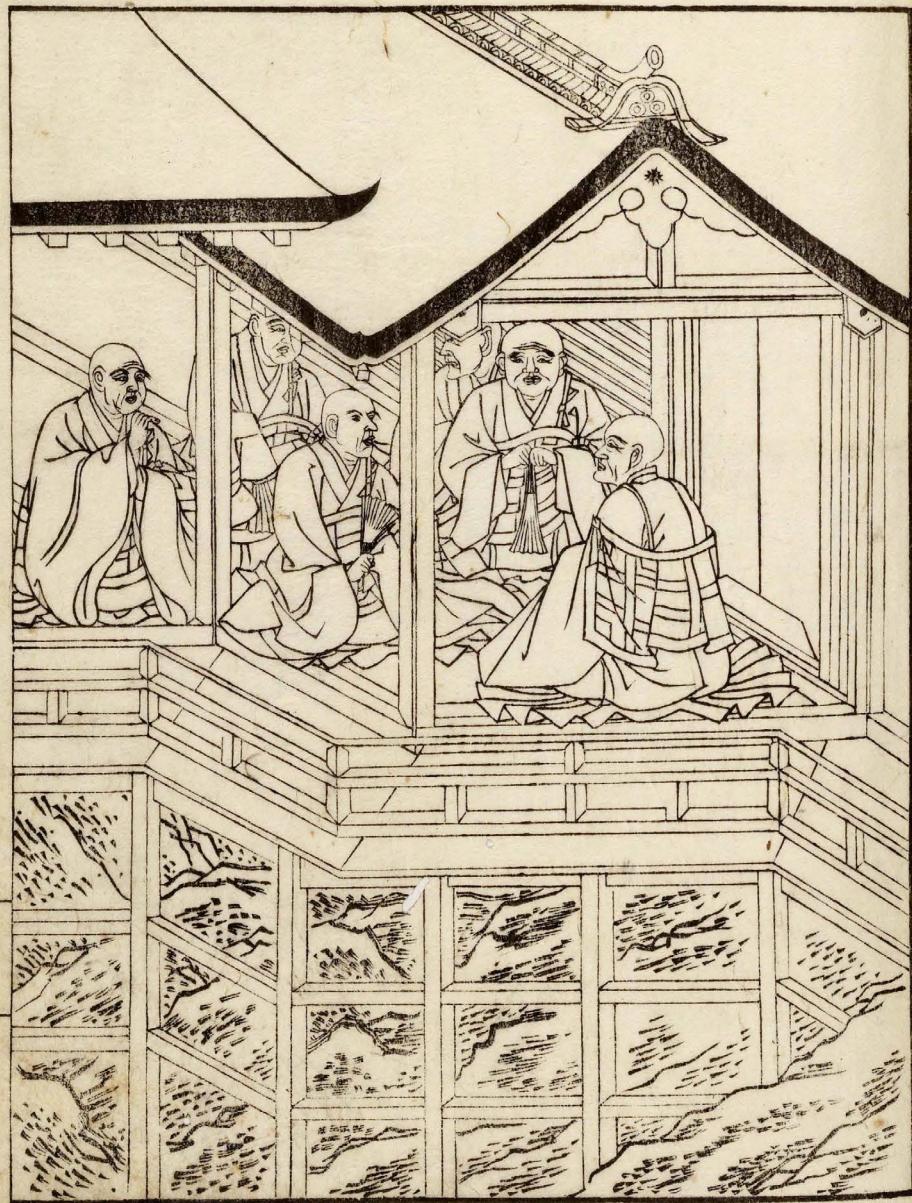
え  
混ざんとばぬくもしむ。をや、台嶺の雲う  
遙かん車をど支度し給ける。あらほべき事  
にやひとせん。小童其類をまくと旧里小さ  
きるあくろあく。花落残いとどもも人のみぢ。  
こうり觀寳大ようちこじ小童を相具して  
母のあり行とてり。娘と裡をける。母暴  
唯一人乃子あれば哀哭して別離をうるし。  
童子母娘誘てり。うけがひた人身娘うる  
あいざき佛教より。眼乃もくれを常を見て  
義母中の榮耀をいとひ詫。翁中父の送玄真  
乃座よどり心のうちうりよと代ぞ。をや、四明  
小の便りてすとなくに一歩踏みよべ。但一母  
せふいあさん程ハ晨昏比禮致ひ。水菽  
乃孝をはとむをとども。有為をいとひ無  
い寫うつるハ美實乃報恩よりといへり。一旦乃  
別離はれしミ永日れ悲歎をのう路と  
なれと再びあがめ。母堂とひうち  
おれて義徳乃祠をのぶといへども。神にひかる



かうくは海うみ小兒こどものくわうを残のこす事ことあはう有い焉  
れきひ志しのびがく浮生うきせいれりやうとほどひ室むろを  
くそくくどおもひほくけ口くち  
形かたち者ものとてそらるぬものとぞかへて一ひと別べつまくえいよせ  
かくて離はなりや、涙なみだをもよよいとよよとひばどど  
絶ぜつひよゆ



江戸より駆け出たる巴戲岳西塔か古持室  
房乃源光うりとににうちて親覺が狀よ云と上  
大聖文殊比像一駄とのまふ。かうり乃人故  
流てにうへある。こそ小童乃智惠のとぐも  
くあ事をあらへんきり。時小童五十案  
近衛院の御宇久安三年春乃事あり。かくそ  
ほの僧が観音が状残ひど。源光般え  
て文殊乃事をきく。唯童子残具。ある  
る。故のぶ源光もあ。童子乃英才をうとす。  
童子對面化上試よぢ。四教義をさばく。童子  
釋えして所く叢談さして不審をあく。うと  
而皆國家の論義行る。あ。こと凡人。あ  
らざるをと。源光卑下せり。彼ハ師の器  
量よあ。頑學につけて天台の奥義を窮免  
めんと。於て功德院肥後北阿闍梨白玉園の下  
入室せ。同年十一月八日剃髪して圓應彌弘  
と号。法衣を着。戒壇院ふるわく大乘  
戒。出家



ある時善弘よりひ跡ふハ既小出家の本意ハ遂  
停ぬ。いやかもぬてハ跡を林敷にのりと申  
の處へ就ある。時よ所の云たどひ愚道比志なり  
とちよの六十巻を續てのちを半意城もどぐ  
庵一と諫名されば寔よむと感し。我宋岳を称  
ぐ。身も永名利をとどめあづうり佛法城修  
学さんたれあり。け後まことにからあることとて生ひ  
十六の春乃春はづので本書を創く。三宵奉城  
絶て三大部をわざう路ぬ。惠解天然小一そく



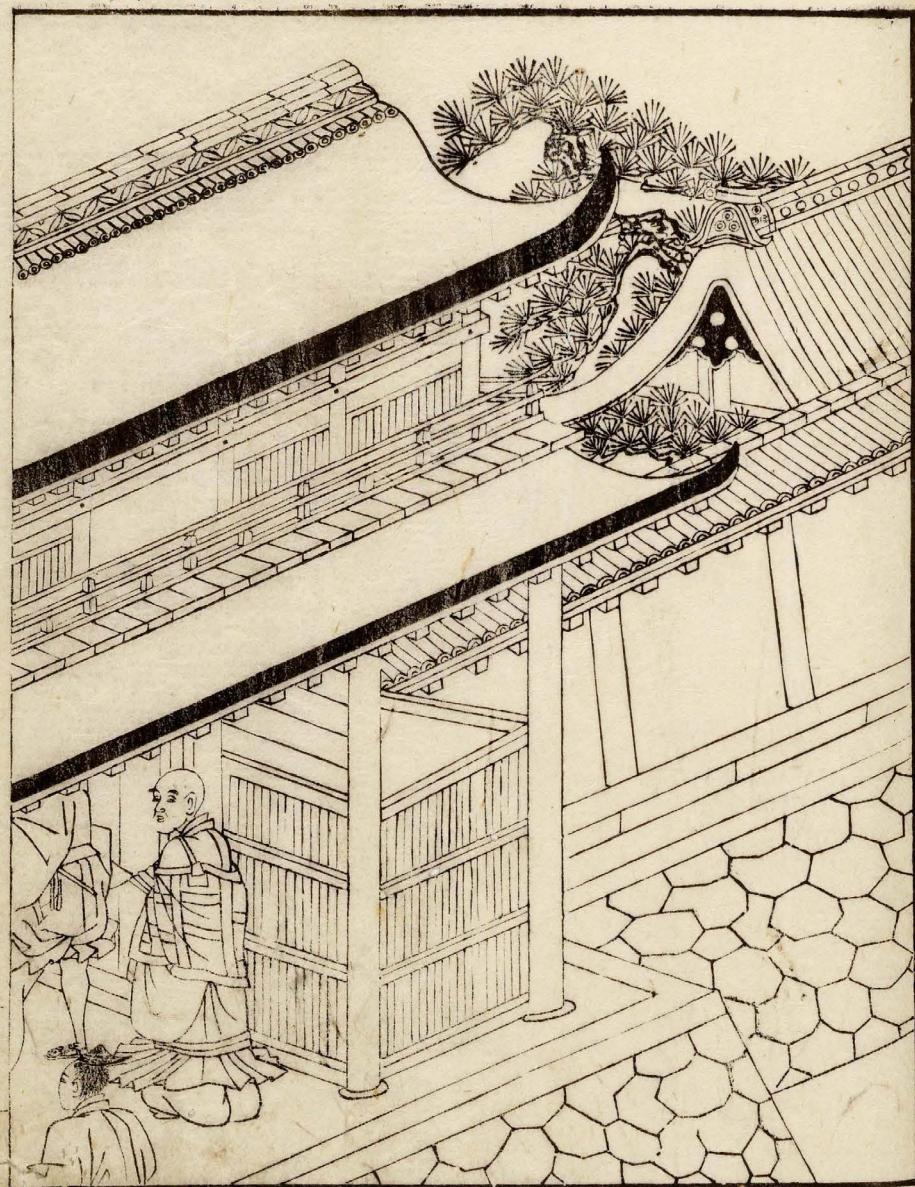
秀逸のきこたり。四教立時の廢立議をくり。三  
觀一心乃妙理玉成もぐ。而立比義勢殆ゆ乃  
教にもあり。あれども、是な政治利の事業  
あるゆをひとひ忽懈席を辭し。久安六年九月  
十二日生業十八業少して西塔黒谷慈眼房處室  
の廬小いより居ね。切雅乃昔より成人比今小む  
まで父の遠えりと死ぐくとて。どこへあり  
愚直乃心からぬるをのへ詰よ。わ年少  
ちやくも離の心をれりせり。はふれ法然に理  
せひぢりちりと隨處して法然房と号し。寔名六  
源光の二れ字と處空乃下北字をそりて處空  
とぞにをりの處空上人ハ大原の良忍上人  
乃附屬圓頓戒相兼の正統あり。瑜伽秘密の法  
よりだすかて一山これ破ゆ。四海ふとを  
たうそひり利

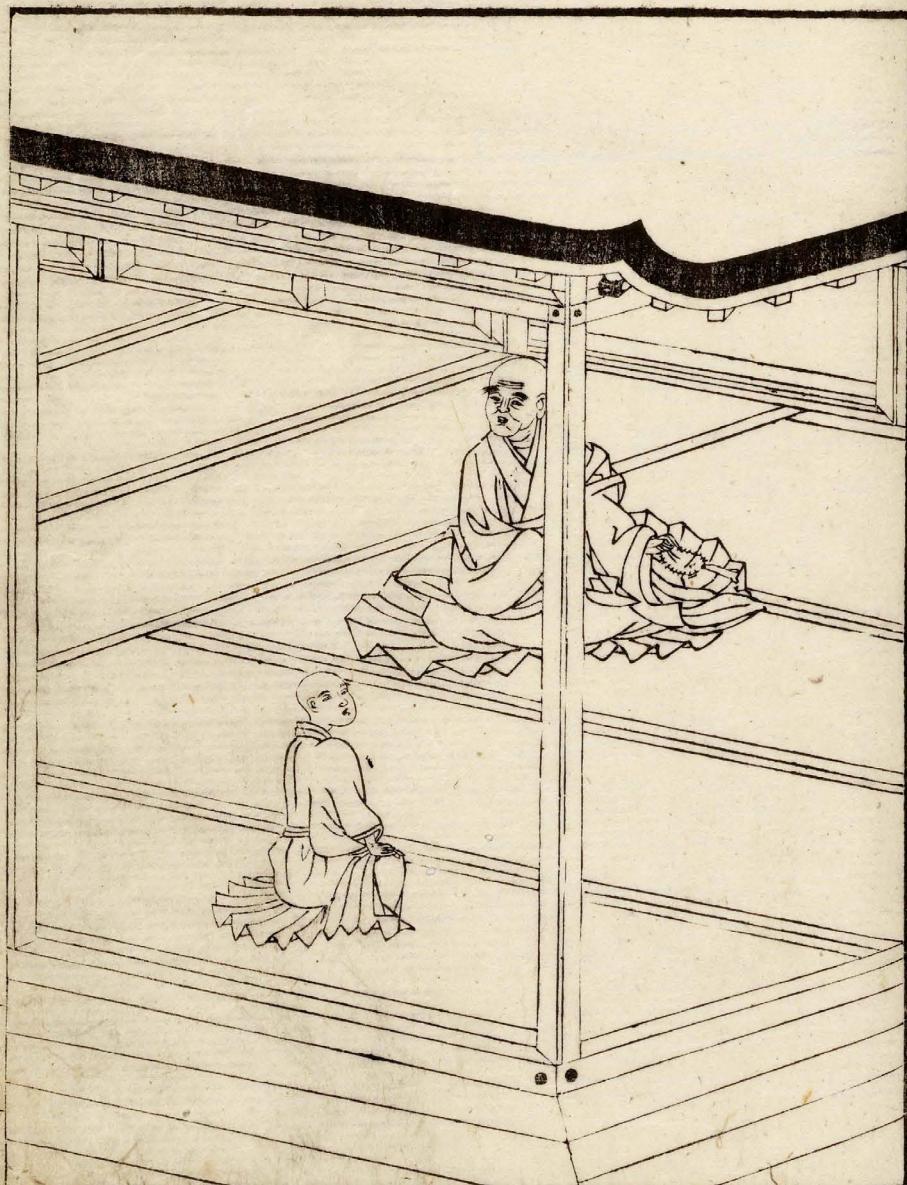
上人黒谷よ蟇居の後ハ偏小名利哉とて一向よあ  
要をもどむる心切あり。あれからりてしげとせも  
ありうこみなびき。うん生先をもあらべきといふ  
事我あまくめんため。一切縫をねえ見るる。數  
遍小をらべ。自化家の章疏眼よあて。どどよど  
や。恵解天然引。てそ乃義理を通達とことを  
し更りんやまとだらか。こよ保ええ隼上人立  
四界敷空上人よいよを乞。嵯峨清涼寺小吉  
糸籠車行き。こよ永法の一車を行請れたる。



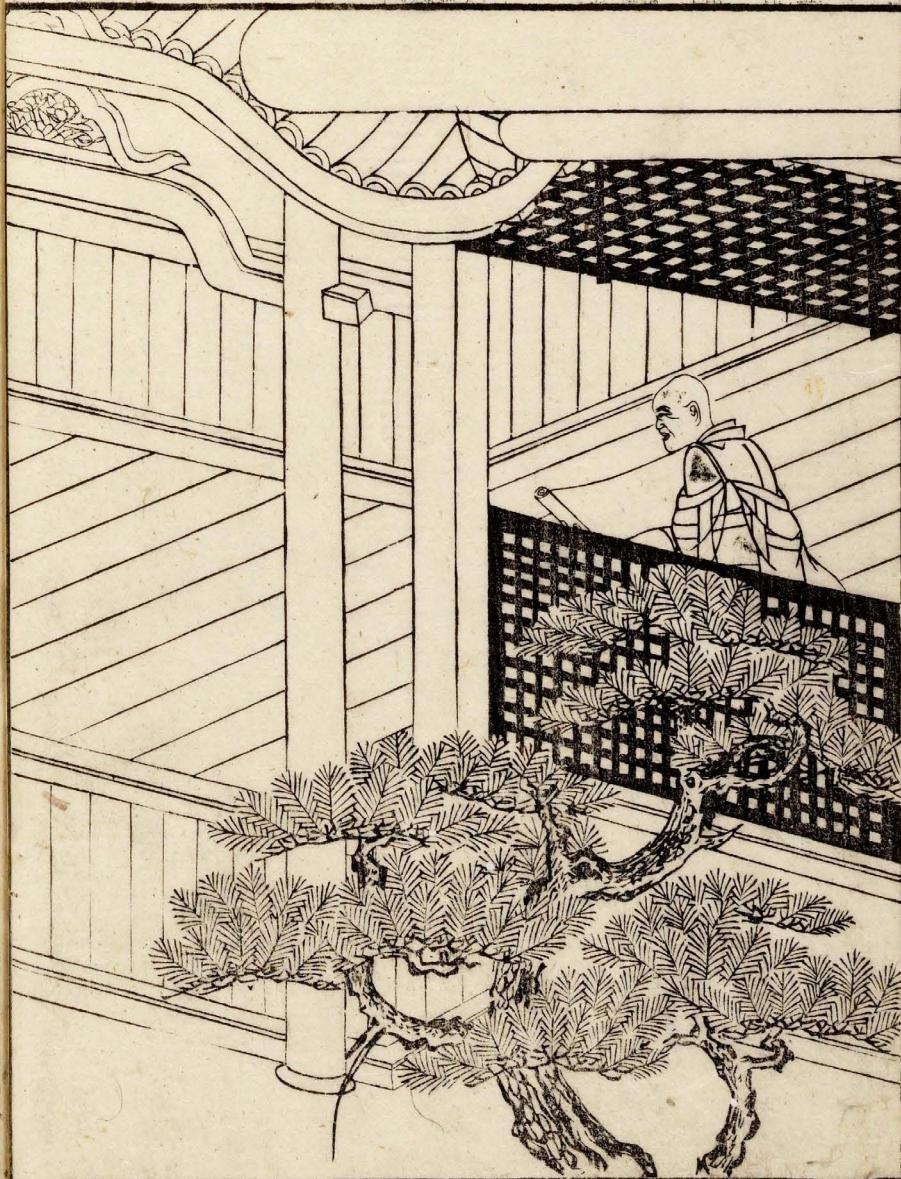
ほので諸宗の学匠我たゞひ其家く乃奥義  
をうづひ其上自解説のべる。面々小可  
各承養へて皆々二字をよりいゆもかふと  
ちり後訴謂法相小八南都よ藏優僧都。三論小  
醍醐小權律師寛雅華嚴にハ仁和寺乃法橋  
大納言慶雅真言小モ中の川乃阿闍梨実範  
深く上人比法器を感ド許可灌頂戒さがサ宗  
の大車のこうを傳へ給ひしが後小ハ二字戒を  
すとありて法をきくかくのどく上人ハ至ら  
宗乃教門りあらうなりとソシモナラモ離  
のうちに煩ひぬ身心やとく次順次解説此  
要路をあんぬめり一切經説ひきん詮事  
立遍あり。一代乃教述よにしてほく思惟も  
あふよかれもうくこともうこ。あらむに想心  
の往生要集とぞう善卒和尚乃寂義法もく  
指南こそり。すれよつきてひ難観元祐りう乃釋  
小ハ乱想の丸支称名比行よりて順次よ澤太  
生次べき古哉判じて丸支のむ誰をあやもくそ

免らむ。と。藏經披徧のをびり。十室と。城うかぐ地と  
 と。ども。せとりわに。尼経の三遍。ほぬ。小一心專念。弥  
 隘名号。行住坐卧。不。問時節。久近。念。不捨者。是名  
 正定之業。順彼佛願。故の文。りい。こ。て。末世。乃。凡  
 術。殊。地。れ。名。号。を。縁。セ。バ。の。佛。乃。願。う。齋。ア。テ  
 た。一。り。小。往。生。を。う。庵。ウ。リ。ケ。リ。と。ひ。ふ。と。ノ。リ。城。も。ひ  
 そ。ぞ。う。先。路。ね。これ。よ。より。て。義。安。五。年。乃。春。生。年。四。十  
 三。卒。も。う。ご。う。ふ。修。行。を。す。と。一。向。う。余。佛。よ。仲  
 築。ひ。よ。り。と。





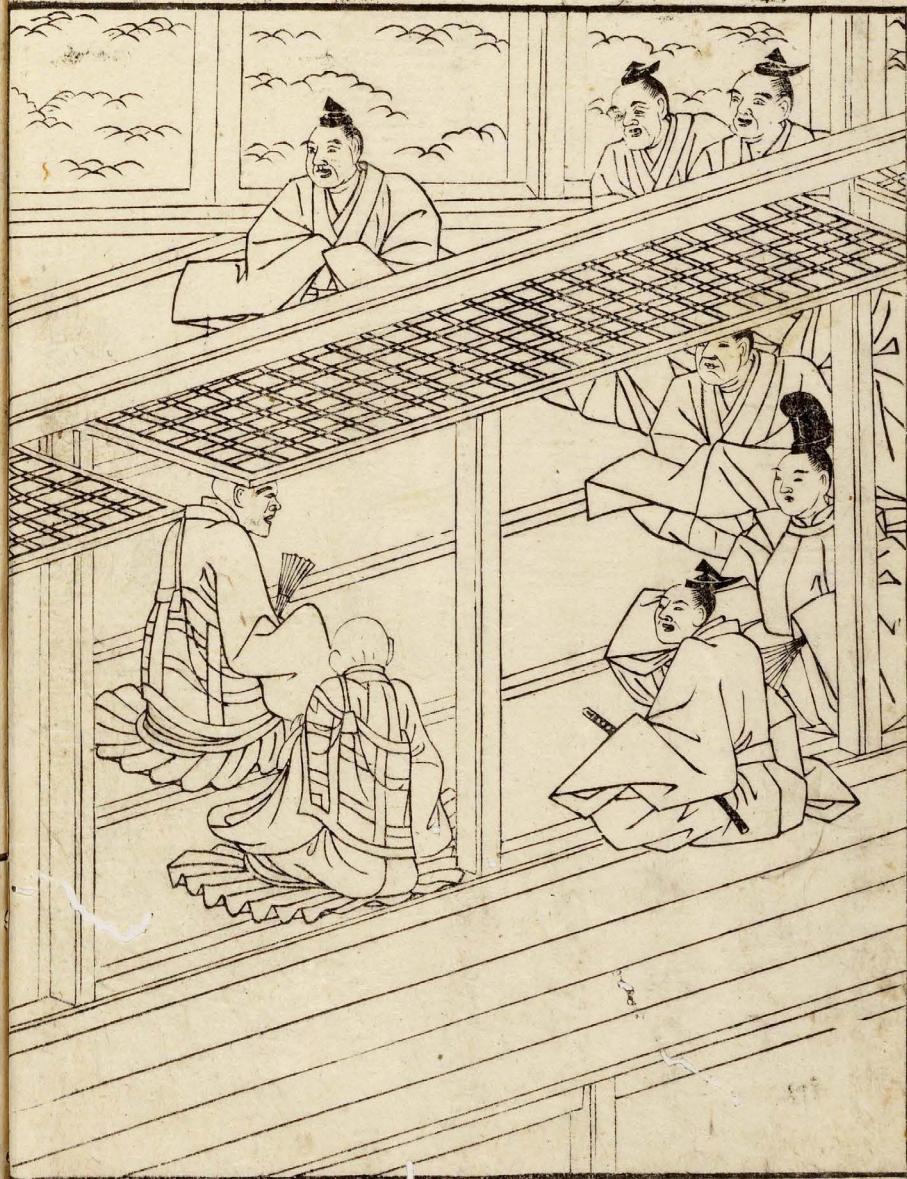
かくて一人一向専修の身となり詠ひ一のちハ。とい  
小四明の巖洞を出て西山乃廣若とひてに在  
る。あらわしき。歩道なくて東山吉永比も小跡  
れる地あるあり。うの慶翁乃つてアハシニ  
てうりつす。詠き。まく詠ひ。もの。は。と。が。海。土。の  
法。を。の。念。佛。行。説。す。先。ら。あ。化。舟。日。よ。も  
げ。ひ。そ。う。り。ふ。念。佛。行。説。す。先。ら。あ。化。舟。日。よ。も  
せ。乃。の。ら。質。翁。の。山。原。屋。小。松。殿。勝。尾。寺。大。谷。を。  
それ。看。あ。あ。ある。と。と。む。詠。化。も。こ。う。と。を。

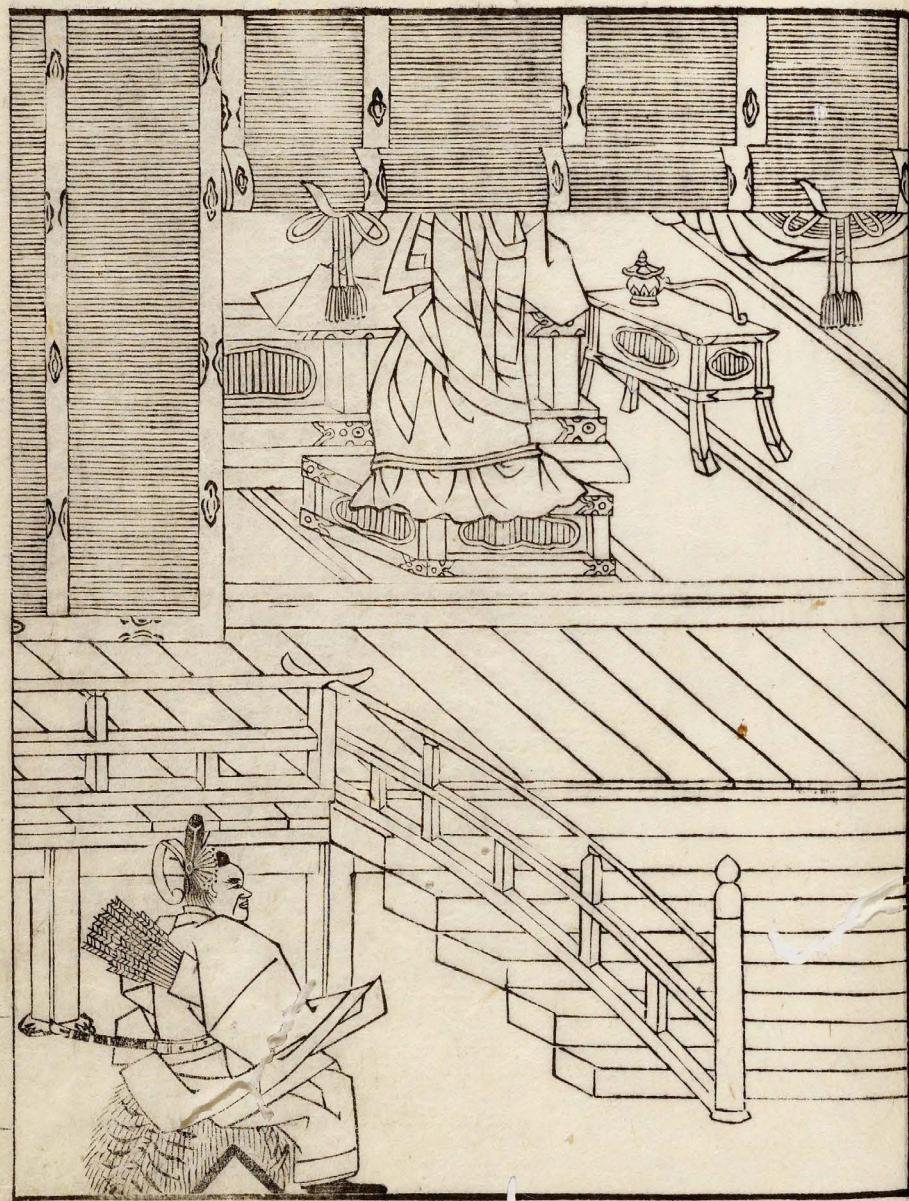




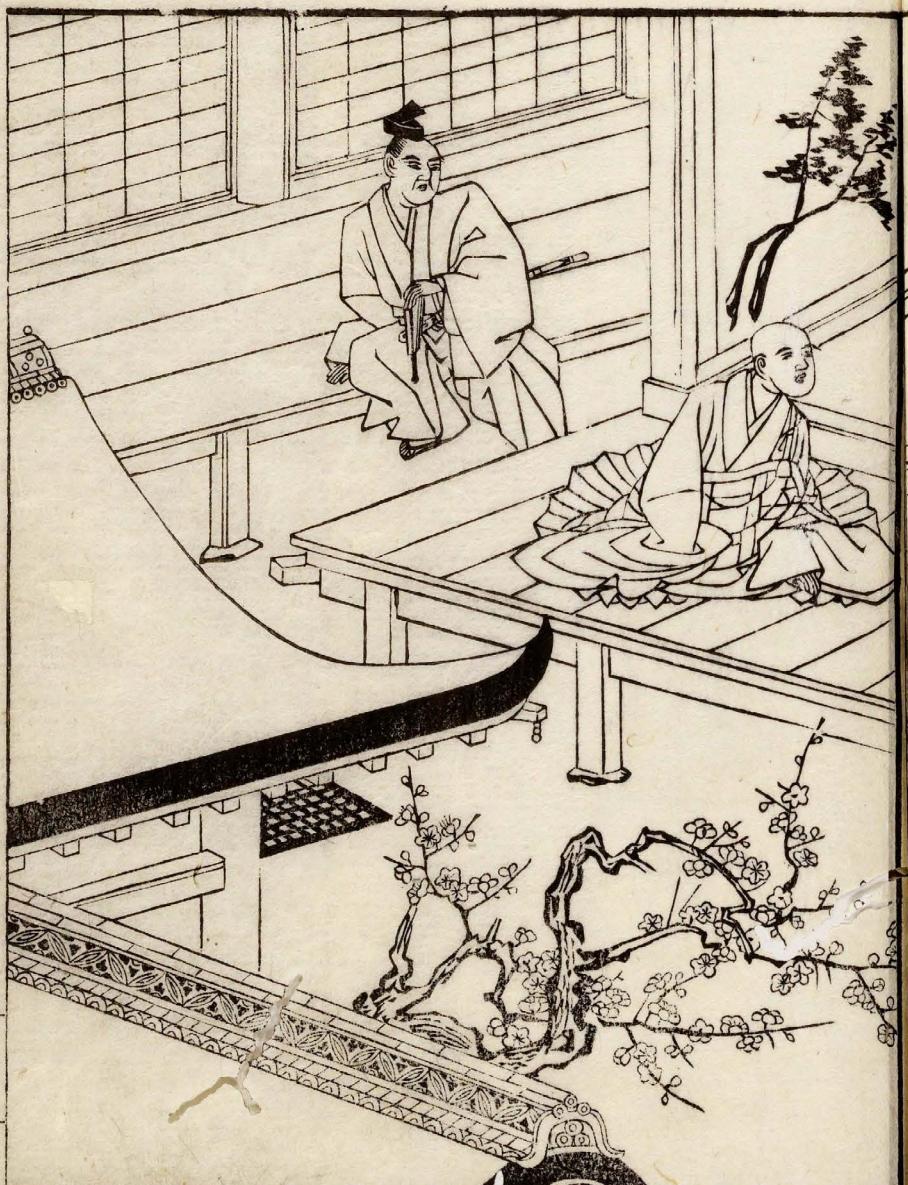
徒ぬりを海を一朝よこち益四海マードよあひゆー。  
お孔孫泥モリコロ乃一教カクやがく縁エニと念佛の修行  
末法モダフり相應ミテキするゆく船ボウ屋ヤ。大谷オガハ上人往生  
け地チきりうの跡アシいぢたあり東西三丈餘アツラ南ミナ北ヒタチ丈  
ぞうり。あめうちに坐スルてらまん場舍マジマほどれ  
りゆくようあくんこえマジマ。との節儉セキゲン乃モぐも  
ありひ柳シラカバとくわきよたゞマツぞ侍スル。じよ乃  
努モリを盡シテこれアリ。

上人道心内小薰くわいド行業外げぎょうがいりに渡わたれ。上ハ  
王公より下おもハ庶民だんみんにりるまでとの徳とく小説こせき  
すとひとれ。院中八十代高倉院御在位乃  
て此承安五年の春勅請ちくじやうりりへバ至上いたまり一乘  
圓戒えんぎ號ごうりあ坐おきて坐おきて後鳥羽院ごとばのいん  
も一乗戒御傳授ごんじゆり。やきて後白河法皇ごしらかわぼうりょう  
ハ上人じょうじん勸化けんか小袖こづく一乘いちじやうて勅請ちくじやうありけ  
どば。上人法住寺の御所ごしょあり一乘いちじやうド詔せうひて一乘  
度戒どくさいきつ事ことアされり。ことに御伝作ごでんさくア





より右京權太夫隆佐朝臣小ちせてよ人乃  
ま影を圖して蓮華王院の寶藏よたきめら  
る。先代小もとの例ありなる事とぞやあつ  
を。あのゆくり一人ハ三朝乃戒師とあふぎ三  
公云卿少しつるまで稽首禮拜せざむハきし



上七三



上七三

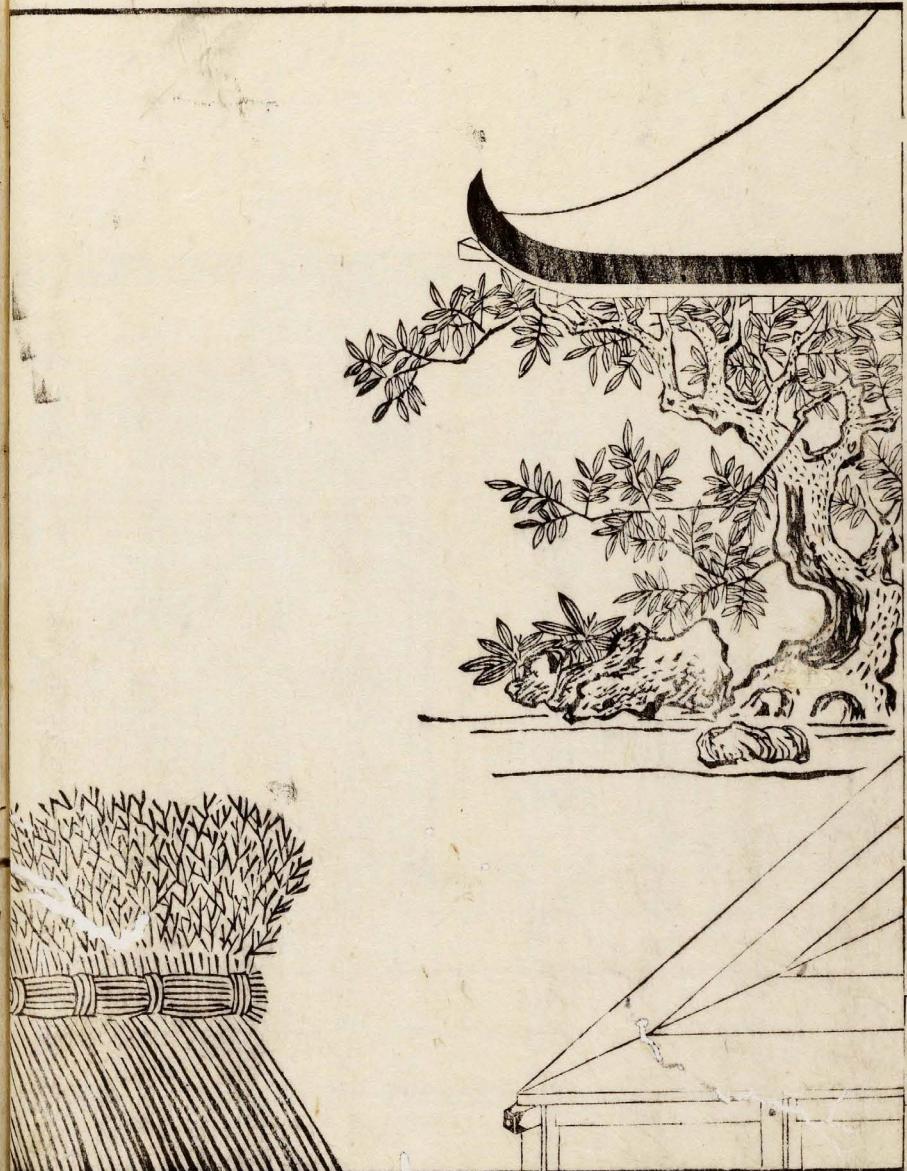
上人或時うりてのこぬそくりを沙工宋哉たる  
心ハ丸支の板土すひまくこと成モ更さん半めあ  
ゑ天口にられバ丸支津土よむ海ヲもとをゆるビ  
小似れど津土判りど處半也。モ一法相少  
らきと津土を判らる事無ア」と(ども丸支乃  
往生城ゆらば、諸宗の所後とれどとい(どもと  
べく丸支板土よびまく事多ゆらさほゆく)善  
導の教義小りりて津土宗城半の時すあひ  
丸支報えりむろゆく事なづかきよ人を多く



誹謗ひりして。かあく汝宗業めいを立たてざとも念佛往生  
を鈔くじ。今宗業めい成なづる事ことハまごこれ當他  
乃のあ是ぜなるべ。我等凡夫ぼんぶむすめめ事ことを入れ、應者  
應土おうどれりとも足たりねべ。もんと強つよき報土ほうどの業めい  
坐するや。此義一往いつうと了とくれるふ似おのる再さい社しゃを  
ととば其の業めい成なづらゆ。ありまま別べつ乃の宗しゆを立  
ちすば凡夫ぼんぶ報土ほうどり生うじる業めいもくすと本もとの不思  
議ふしきも行おこはれど。うつて善導ぜんどう此義このぎよ油あぶらせてくく  
報身報土ほうしんほうど乃の業めい成なづる事ことあるやと云いふ



と人をも諸宗の教門よりあらう。れどもあらん  
修行むじくとの證をぬる者。と人ある。夜暮えら  
く。の山あり峯きりめて高し。山の脇りのぼりそ  
西方見えあり。バ空中。小紫雲うつ。こ乃雲丈  
め。ここ海小さびれる。希有の思はか。然どあらふ。  
これ紫雲のすうう。重量ひ光輝ひ霞。光のすう  
百寶色の鳥。ごびいで。四方小教。じ。身うち  
あらて照耀。きはあらむ。其後。氣鳥。ごびのぼりて  
をとれどく紫雲。乃中。ふしづね。お乃紫雲。やま



ひろこうて一天下に覆ふ。雲の中より一人比僧きて  
上人の面よま怪と。そのまゝ腰うり下ハ金色下  
そううう二ハ黒深なり。二人合掌。怪頭立て  
絶ぐ。死誰人アリ。すゆどどると。僧若絶く。我ハ  
是善導師。汝専修念佛を切らじる者貴。ゆ  
角小まことれ。この絶と見て。若まぞ死ぬ。畫工  
紫臺におほせて。若よえの本を圖さしむ。せるよ  
流布して。若北善導と。しる。死あり。その面像  
のうち小唐絵。うりやうる。絵像にたゞひきり。あく。  
上人の化導和尚。乃尊意よか。くる。あき。ぎ。  
あれを上人の勸進うりうて。称名念佛を信す。  
往生船と。舟を一別。よき。四海小あ。終。前  
兆乃むれ。か。むら。あ死の人。う。伝。と。ま。む

九條園白兼實公ハ假作他より至り。かるべく  
う二人を招請あり。またびく崩り。え久ニ  
年四月五日上人月輪殿にて教説法談あり  
リ。退坐の三光禪閣庭よりくづもあり。を詣  
く上人を禮拜し。うひとのせせよ。洗あくやひ  
さーとをやりて。あきらを詣廻り。川渡よむじく  
作らせて。上人地を石並れて。虛空よ蓮花  
被ぬ。うろり頭光現して。お経持るを。ハ元  
をや。右京權太夫入道戒心中納言阿闍梨尋云



二人の前より後ひる三者見まことうつまうう  
申。沈の橋をこまうり渡ひるりどよ頭光現ひる  
よううてうの橋をは頭光乃橋とぞとげる。もや  
もやのゆゆゆふくとあるに二方後ハいよく佛乃  
ごくふごくゆきひあそびまつむれのゆ

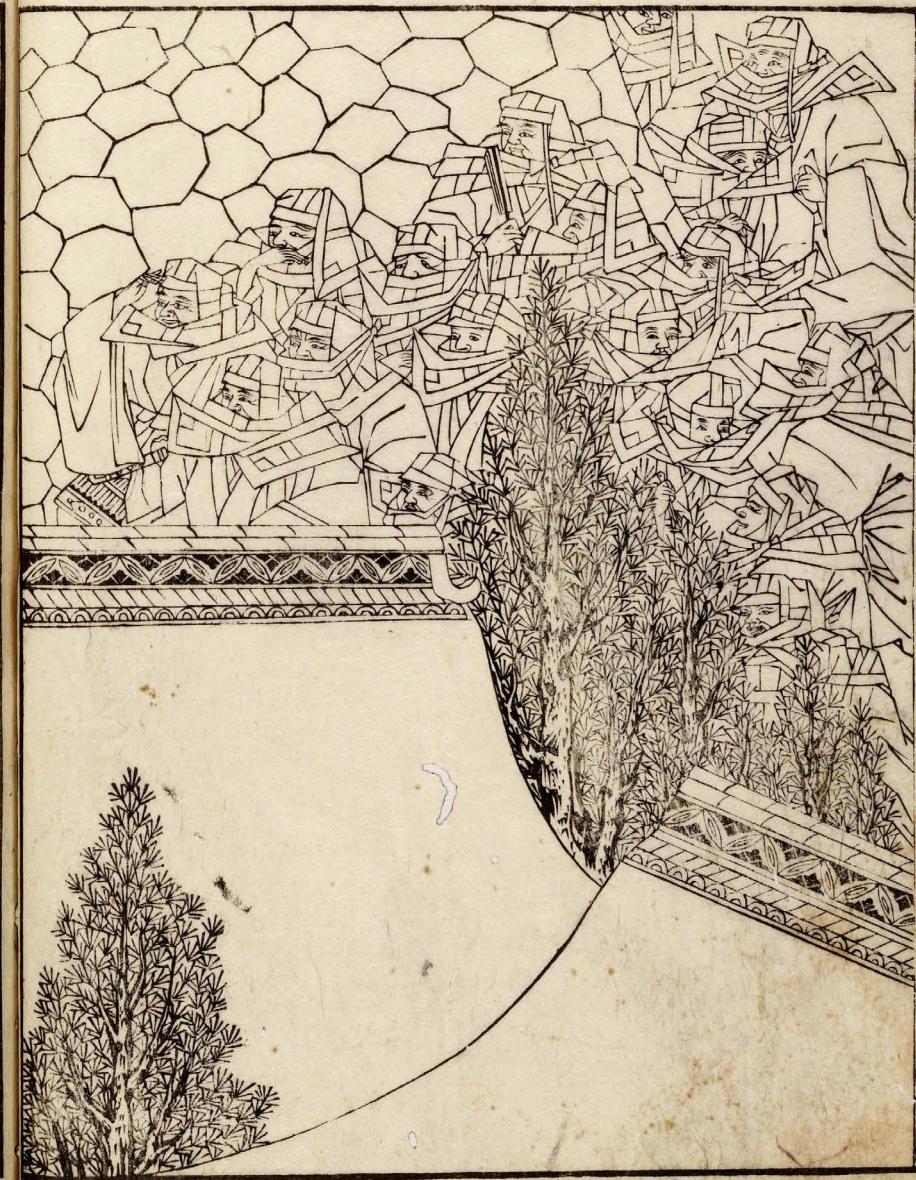
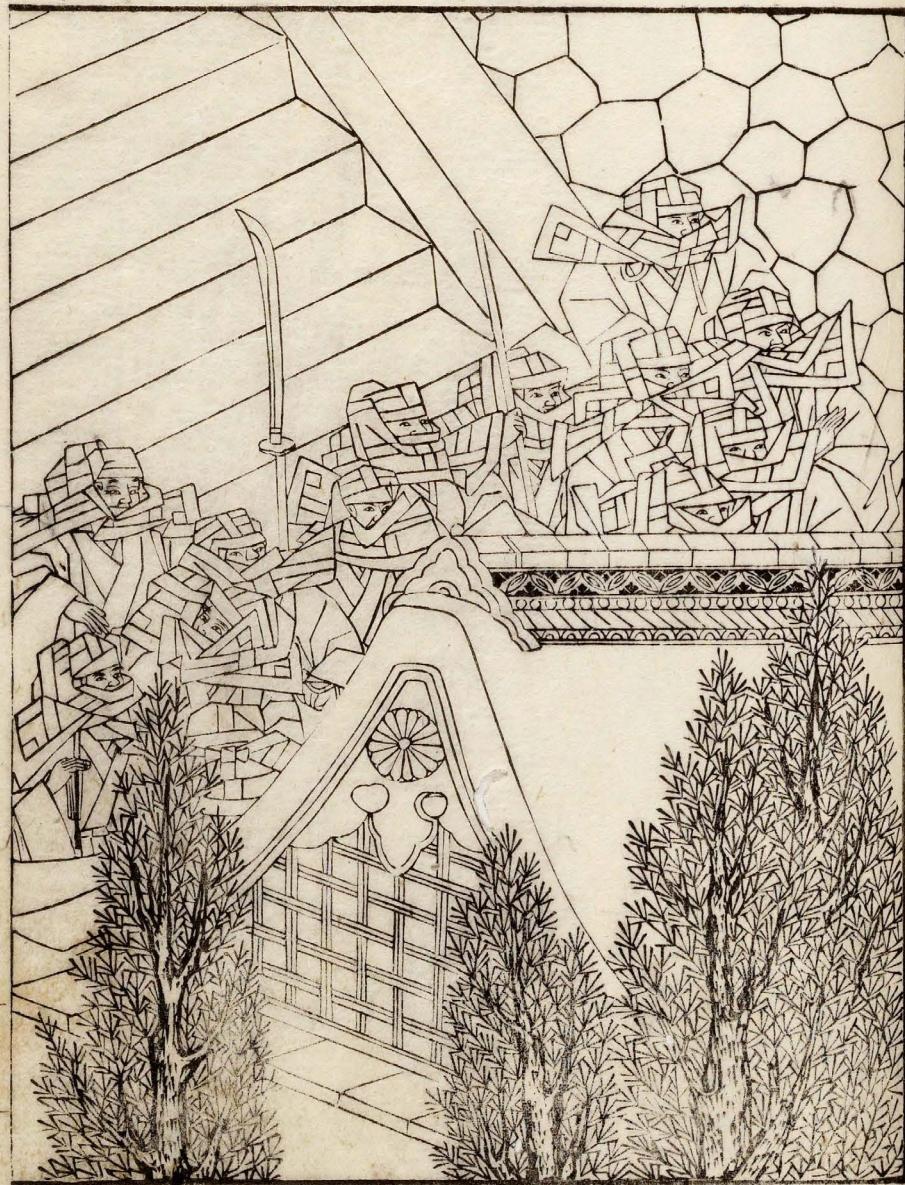


九上人弘通の教門世よひろあり日本一列ゆ  
依もともとぬらく念佛乃一行萬機をりうらど。  
お死小よつて一天比真佛四滿の獨尊とあ  
をぎ。こあ人信伏して称名念佛乃一行まとく  
さんあり。あらるる門徒れ申ふ事修に名成  
かとが願り申せばよそく放逸の業をなほ次  
ものあよかり。これよりて南都少嶺乃元  
往念佛乃真行瑣とづめ上人の化導を障碍  
せんと。土御門院の御宇門徒のじやゆりを



師範しはんより舟ふねにて弊起ひきもとよりきよへてうども  
なむととく庭ばみかへり。元久元年げんきゅう正月正月乃  
比山門大講堂の庭ばより三塔さんとう會合あして東修  
念佛おんぶつを停止きていせきよ。座主大僧正だいそうじ與性よ  
詣申もうあり





上人此事を聞詰て。すくとてハ衆徒の鬱鬱陶を  
厭とぞ。ありどれてハ弟子乃僻見故いまーめん  
たやう。上人乃門徒残らばめて七荷條の事をも  
るして起請をなー。宿老半百のとも、び八十餘人  
をえくびて連署せーぬ。かぐく後證よことあー。と  
れから座主僧正よ進せよ。件起請文云

あぢゆきを亦門人念佛比二人等に付ぐ  
一いぢご一句け文義をううぐはずして真言止觀  
を破し。餘の佛善薩諸謗することを停止を



卷之三

一無智の身法をもて有智の人よ對一別解  
別行乃輩にあひてこのもて諱論をいと次  
事止とべき事

一別解別行の人り對一と愚癡偏執乃心法もて  
本業を棄置せよと稱して。行めどもこれ  
をきくひきゆ事止とべき事

一念佛門よをれてハ戒行第一と号してもう  
婬酒食肉はすまぬ。たゞく律儀を涵むるをハ  
雜行人とあづら。弥陀の本願をあのみの  
ハ造惡をなさんとそれうとこゝ事止と停  
止すべき事

一ひよご是非能りきゆへざる癡人聖教を尤  
もと師説法をじきうほれんまくに私の義  
をのべ。さうに諱論をくわざと智者よわ  
らソ純愚人を迷惑すること止とべき事  
一愚鈍比丘をもちてことに唱道等をこのも。正法が  
もぐれ程く乃邪法をこえて無智の道俗を

教化をもる事、法停止とべき事

一 さうざう佛教にあらば除法をとれてしらう  
て師範の説と号をもる事、法停止とべき事

元久元年甲子十一月七日

沙門源空左判

信空 感西 等八十餘人 連名

右起請文執筆ハ右大辨行隆の息法蓮房信空

あり

正本ハ嵯峨二尊院ニアリ  
今ハ唯要ヲ取テ記ス

かき称て上人より座主修正へ進まゆる起請あり  
あーり勅使御傳第三十ニよ哉なり



禪定殿下山乃本を聞歎詠て。座主大悟正小進  
也。御消息よ云。念佛弘通の間此事源空  
上人乃起請消息等。山門り披露れ後勸諱如何  
を不審。如風聞者餘行ひどもべきよし。勸進此  
條不可然云。此條よを見てハ善道すの意也。旨成  
のぶるなり。然而旨趣甚深也。行者もよし。  
抑諸宗派立乃法ものく自解を専よして餘教  
残なむひととひが弘忍の掌のあひ先德也。故實也。  
乃至今代流季よひうび時國説り屢々。能破



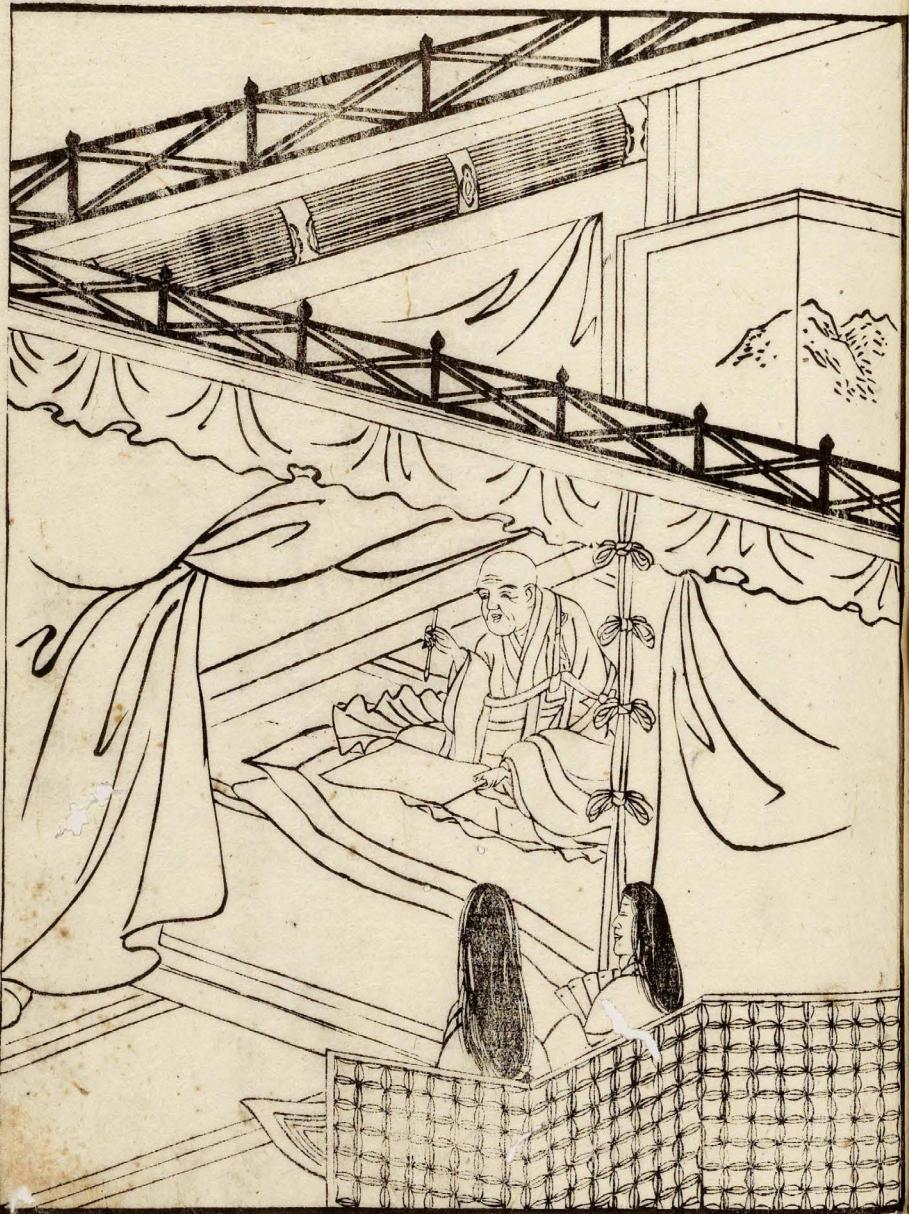
所破しょくとも小偏執おんきうりたり。正論非論ひ三則喧嘩えき  
かうば。三毒うちに催もよキ一四魔よはうかうはうもぐいと  
をとこうあり。嘗こころ小僧幼年おさなのむうま一あり衰暮まへ不  
今こにひごるまで。自引じゆうなうせられことことども本  
願ほんがんを孚ふみ。罪業ざいぎょうれもしといいがも往生おうじやうをゆふ。  
うぬうぬとあうあうべして四十余廻よの星霜せいしやうせたう。い  
ふくふくもと死死いよくもとみて數百萬遍すうひゃくまん乃佛号ねふかを  
こき。頃年ごろありちれちれと病びやくを癪きずり命めいひうひう一佛衆  
ちうゑちうゑよひり。淨土きよと教述こうじゆ此時じふあくあくりて滅めせー  
あんと次つぎおれ我われ見みここを聞きていりいりてうたえいうてう  
志しおのぞん。三天さんの秋あき乃霜月しもきづきをうれ。一寸いっしゆの赤焰あかほむ  
残のこごれ。天あまよあよぎて嗚咽なげのい。地ぢをたたきて熱ねつ闇くろん  
も。何況上人じょうじん小僧しょうそうよをきて出家しゆけの戒師かいしうる會佛  
れ先達せんたつたり。罪ざいなくして濫刑らんけいをうきうきとめらり  
そ重科じゆくわり處しよせは。法ほた先身せんじん命めいを惜うへううに小僧  
ううりて罪ざいがうをべ。とて仰あお危きれこう哉哉ほくの  
りんりんたりよ。とて淨土きよと教きょうを説せつもんこりよ  
まくのまく死衆死罪敬白

十一月十三日

専修念佛 沙門圓證

前大僧正御房

上人乃誓言文小村より禪定殿下會通をすと事  
絶れど。元従の齋討陶訟詫も解らず未だあり。  
暫時後後りとご承と云ひ小池ゆふ着子のとが  
後師うれよほした遷る事に有らびある。



かくて南都北嶺乃訟訟次第よどりうち候念  
佛の奥行無ちにとどる所り。翌年建永元年  
十二月九日後鳥羽院能野山の隙幸ありきと乃  
頃上入乃門後住蓮安樂のとひぐ東山庵此  
谷よして別時念佛をはづめ六時礼贊哉とす。  
さざれの物、物それくるものく哀歎悲喜乃音  
曲成を復りよりづくまうとひもれば聴衆  
おぞりつゆて登心する人あきここう中  
に御所の由留主乃女房出家此事ありりし初り。



還幸のうちよりさゆ小諺。申人やありん。某  
き小逆鱗。うそりく翌。建永二年二月九日住蓮  
安樂院。庭上よめきとて罪科ぞる。時。安樂  
見者修行起瞋毒。方便破壊競生死。如此生盲闇  
提葷。毀滅煩教。永沉淪。超過天地微塵。却未可得  
難三途身の文を誦。ドける。逆鱗いよくさもて  
に一て宦人秀能。よち源とて六條川原かすて安  
樂を死罪よちかる。時奉行の宦人よど角乞。  
却どり日没乃礼賛を行する。よ紫雲室小立ちあ。

諸人あるし。みをあひ所り安樂申らるハ念佛教  
百遍のうち十念。院とよるんをよもてまるべし。合  
掌とよどきとて右かゑさ。本意。院とけぬ  
志院べー。ソレ。高聲念佛數百遍乃の。十念  
よもす。とて左小袖。より見聞の諸人隨  
在乃後院流して念佛よゆきる人有りり



さて住蓮ハ佐木九良吉實より頼らき迎ひの國  
馬渓（さかわ）といふ所かてまことにあそつとござりける。  
あともろきいある事よや。すでにそ乃所からこそ  
されど住蓮最期りあらび紙と硯を乞上人のと  
へいとみびひ文殊（もんじゆ）よりもる。奥（おく）り極悪深重の  
死生他力往生をとまんとる。人ハ住蓮、成手本  
とぞとべーと書いて辭世（じせい）乃一首

極惡りうあらんとの路（じゆ）へきて身故も佛小淨（こくよ）もあつたり  
生業三十九住蓮と總。西方ふむうひきうれもあり。



時より紫雲半雨。かた音樂はのうよ圓。諸人耳目  
おどろき念佛ふゆむらしのをむづり。かくて吉實  
文を上人の山房へまかせり。上人元祐七條の住所  
住蓮が母のもとへゆり。終て母ハ病ひらした  
えて顔よもやあて身ふそく。而後不食うなむ。  
きしき。せめて我子の死體ありともさんすく。枝  
に継りてもううど。思ひぬより不食。といでう遠  
路かる。庵き。途中よ傍邊死したまふをよび  
き半ありなり

此一段ハ東山隆寛律師  
の秘傳鈔より抄記たり

私云住蓮安樂の兩人罪ひこゝれば日ドく  
六條川原ふてきく御庵死矣。住蓮馬園小送り  
一ハうちれよ住蓮房出家して馬園よ住て庵  
室城様へまきときこゑ。を江國馬園の事  
リ千僧供長福寺住蓮寺など三村隣次サリ。  
今よその名城らびじく。え承二年村民相議  
して石塔を立てその標とあく。又作木九昂  
吉實奉行して誅めると諸えよえへ。太  
彼一族もよくハ江別よ住て高嵩馬淵をぞ

林やーあれバ。住蓮すりんもとよりかーあよ住すー吉寔よしむ  
其地域そくち領知りうちきるなる爲ため。されば舊住きゅうす乃  
地ぢあれど彼所かれふるくうて吉寶よしをもひ  
もゆふや是ぜ来きれまつ。あうーあぐく何な半はん皆みな  
因縁いんえん乃のあくたなれバ浮世うきよの一生いっせい執つかめ  
ととづく汝な。唯ゆおののきうて極樂往生ごくらくを終しゆご  
ハ初はじ此下さかも重お氣きの來迎らいぎやうハうるどうー



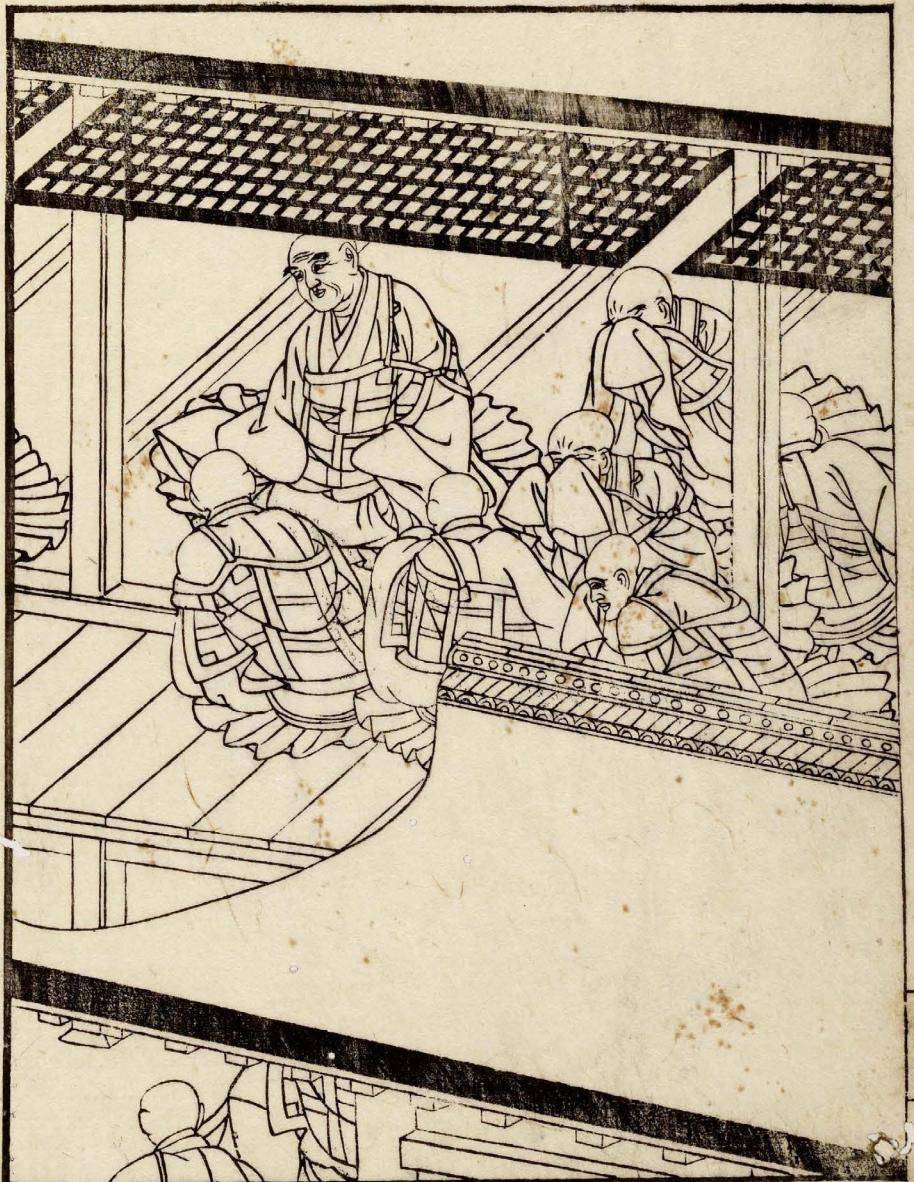
罪惡生死乃たゞい愚癡暗鈍の輩あつてある上人  
比代導かよりて偏よ殊説の本願にゆき往生絆  
縁ざふれり。天魔やまひひん住蓮安樂死刑小  
れもじてのち逆鱗ををやだして、うち縁て弟子  
乃斜底陥よるよけり。戒行堅固にあらうせ詰  
上人を情をくも度縁成わ。——古ハ出家ハ必執治部省之牒印而別髮謂之得度當度縁ナリ  
藤井元彦俗名を下さと土佐國へ遠  
流こげども。時り上人吉水乃御庵室立也。小松  
谷北山房にて諸弟子等よいとぬをもつて詣り。



上人乃勸化城あく貴賤往生れ素懷をむじ道  
俗なあ兒悲<sup>うち</sup>も申あそくをどるりものれ。中  
にも法蓮房伝室進みてゆハ住蓮安樂ハモでよ  
罪科<sup>ざい</sup>セ<sup>ミ</sup>。あうゆり今度上人皆遠流もるハ向ま  
修興行<sup>こうぎょう</sup>あり由賢惠<sup>けん</sup>能<sup>の</sup>ぐ<sup>ル</sup>一<sup>イ</sup>路<sup>ル</sup>。性率乃  
山者に傍<sup>そな</sup>バ坐<sup>す</sup>たのさある<sup>シ</sup>。老邁の山者を囚  
比海波<sup>ひかみ</sup>うう<sup>ク</sup>び<sup>シ</sup>詔<sup>おほ</sup>御<sup>ご</sup>命<sup>めい</sup>安全<sup>あんぜん</sup>を<sup>シ</sup>ド。我等<sup>わが</sup>よ  
恩<sup>おん</sup>額<sup>がく</sup>を<sup>シ</sup>解<sup>く</sup>嚴<sup>きび</sup>旨<sup>し</sup>伏<sup>ふ</sup>うけ詔<sup>おほ</sup>とある<sup>シ</sup>。うう<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>  
歸<sup>き</sup>通<sup>つ</sup>流<sup>りゆう</sup>刑<sup>けい</sup>乃<sup>シ</sup>罪<sup>ざい</sup>よ<sup>シ</sup>あは<sup>ハ</sup>のア<sup>リ</sup>と<sup>シ</sup>。山門弟  
何の面目<sup>おもて</sup>うあ<sup>ム</sup>ん。且<sup>ハ</sup>勅<sup>てき</sup>命<sup>めい</sup>以<sup>ハ</sup>一向專修<sup>いつうせんしゅう</sup>乃<sup>シ</sup>無<sup>む</sup>咎<sup>きみ</sup>  
も<sup>シ</sup>むべきよ<sup>ー</sup>を<sup>シ</sup>奏<sup>ささ</sup>一<sup>イ</sup>路<sup>ル</sup>て<sup>シ</sup>因<sup>いん</sup>く御<sup>ご</sup>化<sup>か</sup>道<sup>だう</sup>す<sup>シ</sup>べ<sup>く</sup>や  
侍<sup>し</sup>らんと申<sup>し</sup>は死<sup>し</sup>る<sup>シ</sup>ふ。上人の路<sup>ル</sup>一<sup>シ</sup>流<sup>りゆう</sup>刑<sup>けい</sup>さ<sup>シ</sup>體<sup>たい</sup>に  
うう<sup>ク</sup>と<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>詔<sup>おほ</sup>と<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>鬱<sup>うつ</sup>と<sup>シ</sup>り八旬小<sup>こ</sup>せ  
あり<sup>シ</sup>。たゞ師弟同<sup>どう</sup>じあこに住<sup>す</sup>とも要<sup>う</sup>娶<sup>めい</sup>  
乃<sup>シ</sup>別<sup>べつ</sup>離<sup>り</sup>らうれよある<sup>シ</sup>。あ<sup>シ</sup>ひ山海<sup>さん</sup>故<sup>ご</sup>處<sup>し</sup>ア<sup>リ</sup>とも  
津<sup>つ</sup>土<sup>ど</sup>の再<sup>さい</sup>會<sup>かい</sup>あん<sup>ど</sup>う<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>ん<sup>ど</sup>も死<sup>し</sup>む<sup>ル</sup>ハ<sup>シ</sup>人の食<sup>く</sup>  
も<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>身<sup>み</sup>取<sup>と</sup>り<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>ども<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>る<sup>シ</sup>ハ<sup>シ</sup>人の食<sup>く</sup>  
あり。なんぞう前<sup>まへ</sup>く<sup>シ</sup>のとまうよ<sup>シ</sup>うんや。あうのと

あくは念佛比興行洛陽にて年ひき。邊鄙みんび  
たもむにて田夫野人をす。先車さきの年來といふ本意  
あり。あれども時ときよりて素意そいいゝべし。  
さて。いは車の縁えんよりて年來といふ本意そいをとげん  
車くるまをこぶ。朝恩あそんこもつべ。此法の弘通こうづうハ人ひとを  
やんとすとも法ほうとれどもべくは。諸佛濟度しゆど  
ちうひぬく冥衆護持めいじゆごじの約福やくふくんじゆり。もととバ  
あんぞ世間の機嫌きげんをかうて經教の素意そいをう  
くはべきや。たゞ一いも不ふハ源空げんくうの興おきなる淨土  
の法門ハ渢世末代だましよの衆生の必定出淮じゆ比要道ひようある  
がゆく。常隨守護じょうずしゆごの神祇冥道めいどうを免て無道むどう  
障難じょうなんをどう免めんりん。命あくんともぞう因果くさいのむか  
一かくざる車くるまを右うひらひらとべ。因縁いんえんのまへば  
あんぞ又今生の再會さいくわいあくんやどどなむせらむ。する  
又一人の勇いさぎ子小對おうたいして一向專念せんねん乃義のぎをのべぬ。り。  
御弟子西阿彌施佛推參せいぢしてかのとく比御義  
ゆめく者ものへづれ。ものく御返事ごはんじ、成申詔せいしめいへづれ  
と申あまとば。上人のことはく汝經うじき義ぎ乃文塔ぶとう又をも

と。西阿申法を經釈の文ハありとリ。まも世間乃機嫌（きげん）  
を存するぞうりれりと。上人又の語づくりをたゞへ死刑  
にちれりとあり。事いよばすべうべと至誠（じしやく）ろい  
ろもとより切あり。とてそよぎる人氣涙（きるい）をぞあうる。  
實（じ）は念佛の法門ハ弥陀乃本願釋迦の勸護諸佛  
の證誠あるうゆ。常隨守護乃諸天善神念佛の行  
者（ゆきがた）もらんと佛前乃契約（けいやく）おもむかへ。との念佛  
を障碍（さうがい）もくらんと佛前乃契約（けいやく）おもむかへ。との念佛  
え。もくしてこめうち業久の大乱。陰岐乃國河波  
の國あわよりうちて御親子のた遷るもひぢに

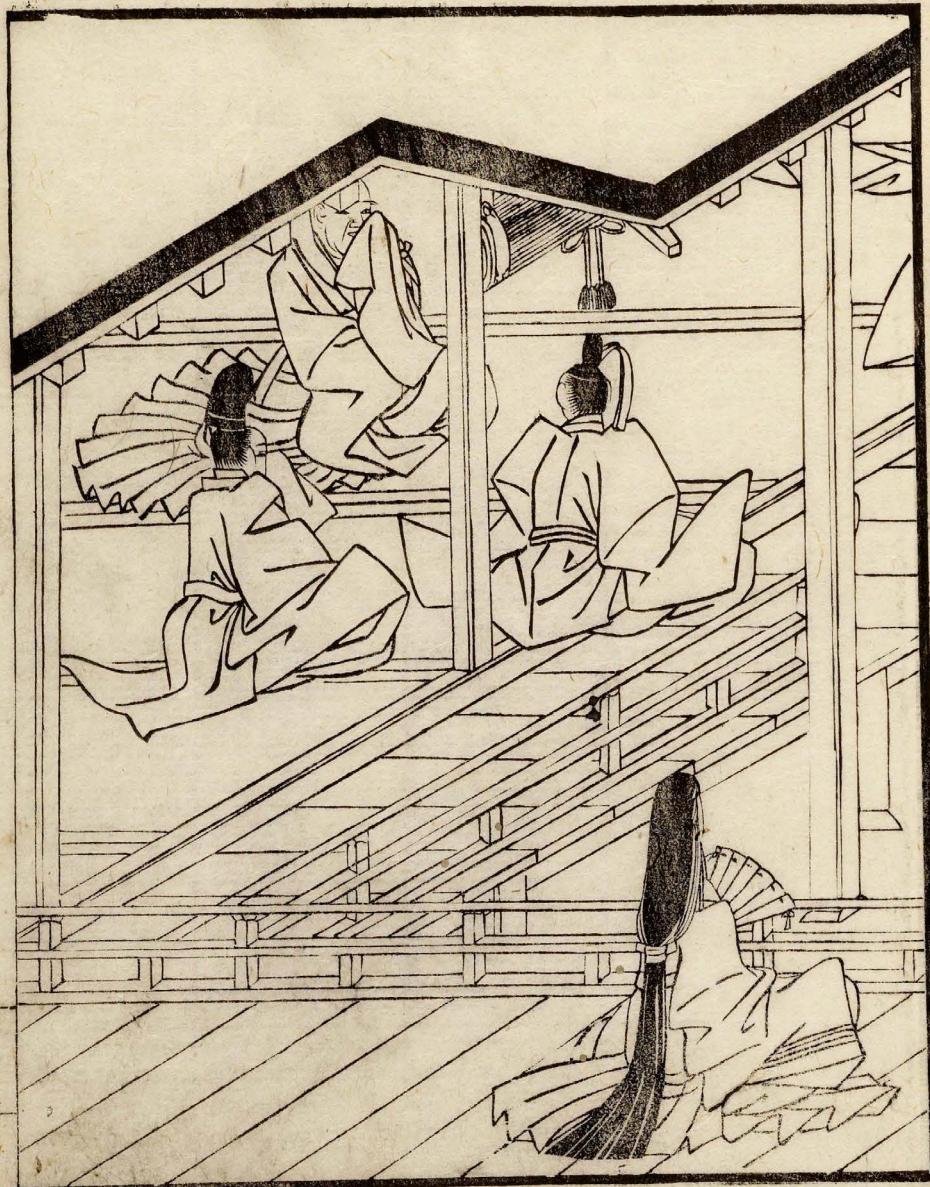


かくて領使左衛門府生清原武次。小松谷の御坊  
にむりひていと免配所へうのきを送りまくら張せ免  
申れバ。泥のり三面をいでたまふ。月輪殿御餘  
波をるゝとて法性寺は小御堂に一夜そめぬ  
きちつゝ北より。禪定殿下ハ忠仁公十一代の後胤  
詩歌乃方幹君ゆるゝ世ニモをあふぎたては  
ゆる。棠花童職の御身といへども偏り順次往生  
乃御のども深うりあり。御出家比後ハ數年上人故屈  
請して出難の要道を尋津土乃法門城談ドたまふ

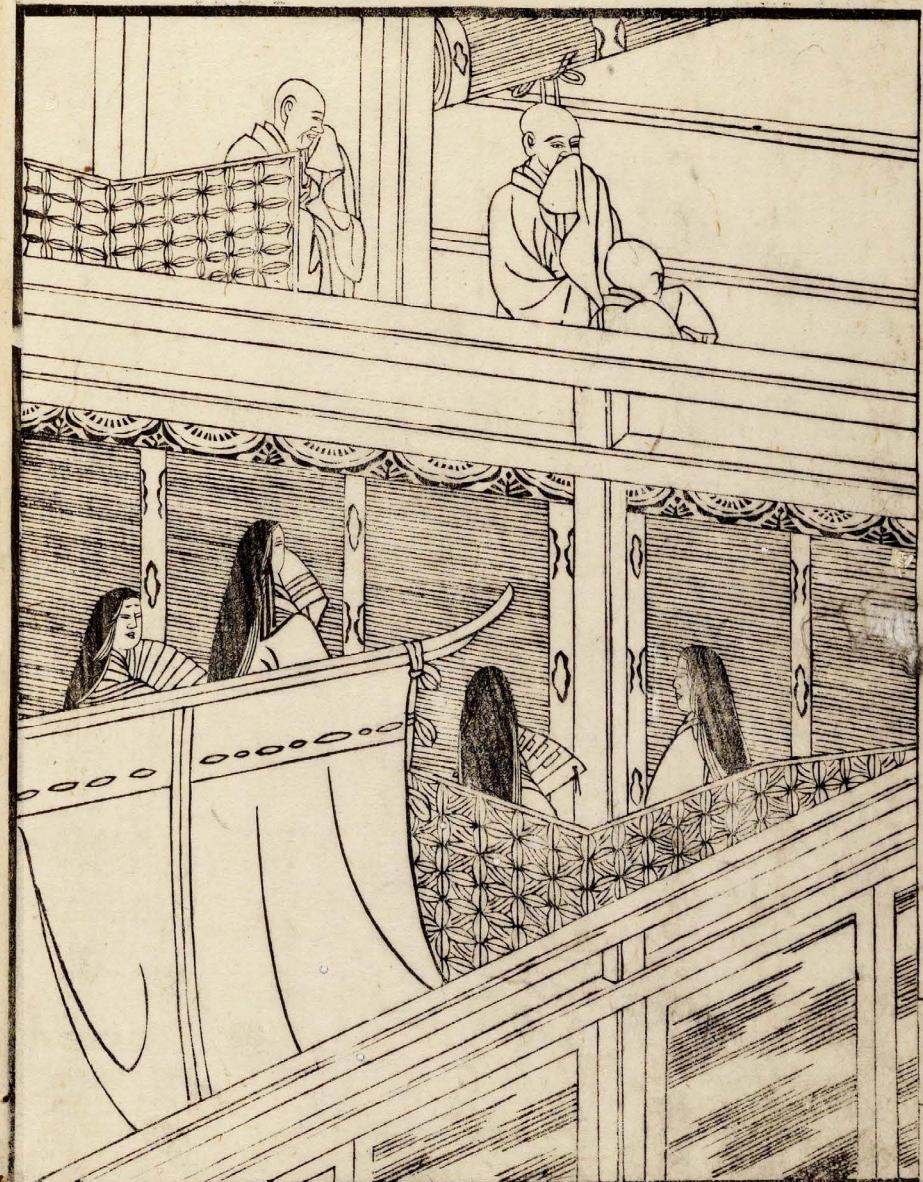


上人乃頭光をぬのうてり殊見一宿のちハ一向小  
生身は佛のちもひをれ一宿きあらばもかくさる  
勅勘をかみりおよし抜きあへりう御お見  
をばりなす。壬午建永元三月七日後京極殿にハ  
ウホヤ社を詣きこれおほていふ。今生の事を  
おほしゆすと一筋小後生菩提乃御ひとゑとなり  
常に上人は御對面たりと生先無常のとづり抜きこ  
ノ免也。往生津土の御法と免功をうきねつゝまう  
御心持もあぐさめ路あり。上人た遷の罪よひこと  
詰ねるまいうち宿業小てかることえきくらんと  
そ勅勘をかみりあまへは上人ハくあげれなり  
きり。禪閣の山中をもむくうびりり。見あく  
ある人もひりちきどらあれ程あり。ある事を申  
さく免也。とひきて世があるうひあれども。御勘  
氣のとじめありた右れく申さんもそれ恐ぬ。し  
連く御氣色ばうりひて勅免を申るふを度  
くぞれ海やうどり。實り上人と兼實公を  
宿世小ふうき因縁のひる事ござ。あれどもとて

世間を見きく。富るものと下賤との  
今日乃立欲より當來の事よりもるもど。  
いよんや高位にて富る人ひよもまことれり。是  
皆浮世の無常をよほじて常位わかもひい小位  
充をよそとめて。愚ぐよりたれ。今殿ごん下げのど  
たハ攝政閣白さくしやくしらノ御身あれ。宦爵くわんしやく祿位ろくいあれに  
過すある人ひとも。あく死死後ご世せ乃のうちハ國王こくおう  
作だ侶みよれき事こと經說きようせつあきあき。唯我身わがみふ  
ものハ善惡ぜんにしき乃業のうぎのとほり。とりたぬひて。  
却かて。アリ称めい如ご未みの本願ほんがんに歸き一速いつそく小出ちゆつ難むづ生う死死  
順次じゆじ往むか生うを称めいひ。致いたあり。ご



三月十六日花のゑに成ひて終邊國乃夷境いきゆう  
うのを終たまと進立あそ乃宦人領送使。其外隨侍まよ乃役人  
法性寺の小御堂にひひ。上人既既よりて終御輿おひよの  
らを海あま凡上人一期ご乃威儀いぎハ馬車輿うまこしあとよハ  
終おひす。金剛艸履こんごうくさりうて歩行あるか一終おひき。あうれども食  
老邁ろうまい比上長途じじょうあびはくび。うつて棄輿きこしひりげふ  
こそ。力者ごくしゃ比棟梁どくりょうハ信濃國の住人角張つのわらノ成阿弥陀  
佛。との外惣そぞうト六十余人。又終おひ最期さいの御送りと  
集あつリ給たま人ひと。凡九重ここの比うち常つねに化導けだう小あがく



ともざうのとれく。御餘波をかゝる前後左右は  
 一もあざよ人幾千萬といふ教徒もてど。上人の御姿  
 を見たてちつまへ先達もの、渙あり。それものうも法  
 德高貴乃御名號替在纏業報の俗名藤井元彦  
 といふ名を呼んでる。いづとの人うそれが見あれをき  
 なげうざん。貴賤先若乃が考むゑらも。ふも  
 道俗のあよ渾大地をうねねと。上人諸人残り手め  
 んこしての後々。驛路ハ是大聖行處。漢家小ハ  
 一行阿闍梨日域小ハ侵の優婆塞。謫居ハ又權化  
 のをじ所。震且小ハ白樂天吾朝にハ菅秉相。在纏  
 出纏皆火宅也。真諦俗諦併水驛ありとぞ作  
 られざる。皆人以もととこハ右とくとも。七十立業の  
 御先駆見る魂をけーおゆふ渾ぎだらば。  
 ワタゞく月輪殿ハ御輿乃長柄不縋り。あは實不  
 長令ほど心くる。きみの仕事。凡ハ上人より先達  
 てこむ。ひだりけ半てゆくんとおもひした。上人  
 配所すうのとれたあとで再會の時の時にうちん  
 罷。在上人を土佐國までうれいなべ思ひ充ち悲

法いそせんせめそとありもらうたうよりは  
らば考候乃たううりうり。讚岐國小松庄を我  
領地たり。ローふうへまてあくろんいふ  
との船一バ。領送使領掌へそたそひ命をめさ  
るども上人乃ゆへあくばあくらうみん仰せた  
あくびいきくやうるとやられバ。殿下ゆふうぶ  
かまうれく。さとバ上人讚岐國へ渡。己船へそそ  
まれつち一首を詠。ドモ

ゆりきくわはうきの船あれど支那をべきと仰。モ  
ウく御ト終ヘバ上人は遠。ト

身の身ハまくひととて消ぬともこうハ日一光のうてそど  
かくゑいド旅人。こよとよどひの言葉。別離ハ育  
ち乃ち。今生の再會。船。ロガ。トソ。トソ。  
圓法結縁ハ累劫の芳契。眞實。小林名せバ。津  
土の再會。をうんどう。ごうりんと。是。残がぼりて。御  
輿を昇。あよて。早御船へ。といとぎ行。あくと。バ  
海山千里。波濤。とも念佛の向行。後生一  
蓮同生ハ豈た。アタシ。まふあくと。や



上五十九



上五十九



